
純粹な炎のアンサンプル

落果聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純粋な炎のアンサンブル

【Nコード】

N8195Z

【作者名】

落果聖

【あらすじ】

二人がかりで一つの魔法を唱える現代。

炎を使う魔法使いの名家の生まれである火野昇は、天才魔法使いであるが炎の魔法を一切使うことが出来なかった。

そんな昇は自らの野望を叶えるために魔法高校に入学した。魔法高校では二人一組で魔法を学ぶのが基本であり、一緒に学ぶ相手の実力が学校生活を大きく左右してしまう。しかし残念な事に昇のパートナーは炎の魔法しか使えない補欠合格のド素人である倉守美海になってしまった。

そんな二人が一つ屋根の下に暮らし、助け合いながら自らの望みを叶えるために戦う現代学園ファンタジー

ダブルヒロイン、チート主人公になる予定ではあるけど予定は予定で未定だったりします。

プロローグ

魔法高校、正式名称は魔法特区大学附属高校には毎年三万人近くが入学する。

なぜそんなにも入学希望者がいるのかと言えば、この場所では地位も名誉も金も望むのならば全てを手に入れることが出来るからだ。二十歳未満で所得が一億円を超えていることも珍しくないし、卒業後政治家として活動している人もいる。

そこまでいかなかったも、魔法高校と大学併せて七年間を過ごしほどの成績で卒業できたのならば、一流企業へ簡単に就職することも出来る。

これが学校の光の部分。

光が有る場所には必ず闇ができる。

魔法高校が発表しているデータでは毎年数千名にも及ぶ死傷者が出ている。名目上は事故として処理されているが、実際は魔法使い同士の決闘によって死んだり怪我をした数だ。

魔法使い同士の決闘では、ミンチになった肉片が残っていればマシな方で、死体そのものが消失していることも珍しくない。

対照的に過失致死罪での逮捕者はほとんど居ない。これは魔法高校が事実上殺人を容認しているからだ。

だからといって魔法高校が生徒の死を望んでいるわけでは無い。魔法高校では入学希望者に対して事前にこれらの事をきちんと説明している。

それでもなお、若者達はそれぞれの野望を、希望を抱いてこの学校に入学してくる。

出会い編 1 (前書き)

ふりがなの振り方を今必死で調べてます

出会い編 1

一瞬の静寂の後拍手が湧き上がった。最低の気分だ。

まず闘技場を始業式に使うって言う発想が最悪だ。毎年この闘技場だけで死人が100人は出てるぜ？ そんな場所で祝いの門出が

なんて語るのは馬鹿らしい。

そんな物よりも俺が欲しいのは歓声だ。煮えたぎる興奮が頂点に達した時に心の奥底から湧き上がってくるような奴。それこそが勝者に対しての報酬と言う物であるべきだろ？ まあ、新入生代表の挨拶であることを考えれば入試一位で突破した者への報酬と考えられるけど、大半の人間にとっては常識だからやってるだけにすぎない。

挨拶を終えて壇上から降りる頃には闘技場内に広がるのが拍手から話し声が変わっていた。一人二人ならいざ知らず、この騒音に参加しているのは会場内にいる新入生約30000人で、自分の声を相手に伝える為にさらにわめき散らすものだから收拾がつきそうもない。

うるさいって思うけど、だからといって騒いでしまふ気持ちも解る。これからこの学園入学式における最大のイベントが待っているのだから。

席に戻ると俺の相棒である氷河樹里（氷河樹里が隣の席で待っていた。）が隣の席で待っていた。

氷河樹里とは五歳の時から和声魔法（ハーモニー）と一緒に使う相手である和音（コード）として付き合ってきた。おかげで異性としての認識は全くない。

「ノボルかっこよかった。」

樹里は俺にそう語りかけながら手のひらサイズの袋を俺に手渡した。この袋がイベントの主役だ。

「何言ってるんだよ。俺は何時だってカッコいい」

「たまには褒めてあげようかと思って言ったらこれだもん。可愛く

ないな」

へえ〜樹里はそんな事を言うのか？

ならば意趣返し。

「……樹里の髪の毛綺麗だよな」

意趣返しではあるけれど、心にもない台詞かと言えばそうでもない。
い。

「髪は乙女の命だから綺麗にして当然だもん」

樹里はそっぽを向いてしまう。

髪は乙女の命と口癖のように言うだけあって、樹里の髪の毛はかなり綺麗だ。胸元まで真っ直ぐ伸びた髪で、風にいつも弄ばれている。色は銀とも青ともつかない色で、光の反射で幾重もの姿を見せる。

もつとも、髪色と言う点については、氷河の一族はみんな同じような髪色だ。魔力が関係してらしいけど、詳しくは知らない。さすが魔法使いの名家と言いたい所だけど、他の名家にそんな特色は存在せず、たまに全然違う髪色の子供が生まれたりするぐらいだ。少なくとも火野昇^{ひののぼる}、つまり俺は黒髪だし、火野の一族もほとんどが黒髪だ。

俺は樹里の顔を手でもって自分の方へ向けた。

樹里の顔は紅く染まっている。

そして何より、そんな顔を見せたくないのか必死になって反対へ向こうとするから可愛い顔が台無しだった。つぶれて変顔である。

さてこの顔は一体どこまで変顔になれるのだろう？ と俺が趣旨を大幅に間違えようとした時に闘技場からざわめきが消えた。

壇上には樹里の叔父である氷河氷柱^{ひょうがひょうすず}が立っていた。

前に何度か会ったことがあるけれど、あまり相手にしたい相手では無い。快樂主義者を自称して、その場その場の刹那的な生き方をしている。そんなわけで俺も樹里も何度か迷惑を被った事がある。

「君たちの学年を担当する氷河氷柱です。まあボクの事なんてどうせイヤでも覚えるので、さっそく本題。」

さきほど君たちに配られた袋には指輪、鍵、寮の住所と部屋番号が書かれた紙の三つが入っているはずだ。……もしも無かつたら後で職員棟に来なさい。

それでだ。指輪を取り出して中指に付けて貰いたい。

この学校で初めて魔法を学ぶ物も少数いるので説明しておく、この指輪は結合指輪リンクリングと呼ばれる物で、二つ一組の指輪だ。この指輪を使い二人一組で使う魔法、和声魔法ハーモニーが君たちの学ぶ魔法だ。

なぜ二つ一組なのに君たちの手元に一つしか無いのかと言えば、もう一つは君たちがこの学校で和声魔法ハーモニーを使う時のもう一人の相手である和音コードの手に渡っているからだ。和音の相手に不安があるかも知れないが、入試の時に相性も調べてあるので、魔法が使えないなんてことはまず無いので安心して欲しい。

この指輪は魔法を使うだけでなく、もう片方の指輪をはめている人物と通話することが出来る。それで通話して友情を深めて貰いたい。

相手の声は頭の中で響く、自分の声を伝えたいときは口で喋るのではなくて、強く思えば伝わる。逆に言えば言いたくなくても伝わってしまうこともあるので、慣れない内は気をつけるように。以上これをもって入学式は閉会。」

そう言うつと氷柱は逃げるように壇上から降りた。

俺の時とそう変わらない拍手が舞った後についてみんなのお楽しみタイムである和音発表の瞬間だ。

和音は席替え、いや、クラス替えなんかよりもよほど重要だ。和声魔法ハーモニーを一緒に使う相手を変えることはほとんど無い。相性によっては全然使えない可能性もあるし、同じ相手としての方が魔法の扱いが容易になるからだ。

逆に言ってしまうば、そう言う相手がすでにいると、まず相手が変わるような事が無い。長期間同一の和音だと、お互いの魔力の波長が似通ってくるのだ。

つまりだ。十一年間も和音である樹里を超えるような相手なんて

まず表れる訳が無い。見知った顔に安堵することはあっても驚きやとまどい興奮なんて物とは無縁だ。

そう言うわけで、俺にとってはこのイベント、特に楽しいところが無かった。通話の必要性が全く無い距離だぜ？ 友情を深める必要なんて今さら無い。

俺は袋から指輪を取り出すと、早速指に付けることにした。と思つたら樹里に止められた。

「もう一人で付けないでよ。いつせいのっせ、で一緒に指輪をつけようよ」

「はいはい」

まあ樹里が相手なら特に問題も無い。人見知りと言うわけでも無いが、これから寮生活が始まる時に友人が居ると言うのは非常にありがたいものだ。

「いつせいのっせ！」

樹里のかけ声と共に俺と樹里は指輪をはめた。と言うか何でお前は左手薬指にはめる？どの指でも、と言うか足の指でも問題は無いけど、そこは別の意味で問題があるだろ？

指輪をつけて十秒もしたけれど、頭の中で特に言葉が響く様子は無かった。樹里が目を細めてにらみつけてくる。メガネでも忘れてきたようにしか見えない。

「ノボルなんか反応してよ」

「お前こそ何か言えよ」

「わたし言ってるよ！」

「俺も言ってるぜ」

てすとてすとてすと。と面白さの欠片も無いつまらない文章をね。「故障？ 叩けば治る？」

「電化製品は叩いたって直らないし、クソガキだつて叩いて直る事の方が少ない。ましてや繊細な魔法道具である結合指輪アイティファクト
リンクリングが直るわけ

無

俺が言葉を続けようとしていると、樹里の顔色が変わった。おぞましい何かを見たような顔で、樹里が迷子になった時同じような顔をしていたのを思い出させた。

「ねえ……ちよつと言いにくい事いいかな？」

「じゃあ結合指輪リンクリングを使って話してくれ。それなら聞かれない」

「もう！そうじゃないの！ あかね。どうやら別の人が和音コードみたいな」

俺の頭は理解を拒絶した。

「俺よりも相性が良いと言うことはかなり強いって事でもあるし、むしろ良い事だろ？」

一般的に和音コードは自分と同じ程度の実力であることが望ましいとされる。和音コードを決めるのに使われるワグナー方式の判別法では実力の部分も加味されている。つまり、樹里の和音コードは俺ともほぼ同等の実力を持ちつつもさらに俺よりも樹里との相性が良い相手であると言ふことだ。

「でも、わたし、ノボルが良かった」

樹里は本気でへこんでいた。

「俺も樹里相手が良かったが、決まった以上しようがない。」

俺は樹里の頭を撫でる。何時撫でも撫で心地は満点だ。

「こんなところでへこんでると和音コードに失礼だ。いつもの笑顔に戻って出迎えてやれよ」

「う、うん。じゃあ向こうから場所の指定されたから行ってくるね。また後で、連絡してね、絶対だよ。そしたらお互いに和音コードを紹介しようね」

樹里は俺に向かって手を振りながら人混みに紛れていく。名残惜しそつにこつちを見続けるものだから樹里は他の人に当たってしまった。

俺が見て無くても大丈夫なのか少々不安だが、俺が付き添う訳にもいかないしな。俺にも和音コトが待つてることだろうし。

向こうが連絡してくるまで待つしか無い。

俺は携帯ゲーム機を取り出して、時間を潰すことにした。

遅い。あんまりにも遅い。カップラーメンなら三つ出来るぜ？

二分で食べる俺なら五個は食べ始めてるぜ？ 本当に故障か？

(ごめん待った？ あんた名前は？)

妙に癖のある女の声だ。

(何で遅れたんだよ？)

(そこって普通ボクも今指輪はめた所なんだよって返す場所じゃないの？)

(俺は女に特別優しい訳じゃない。それに待ち合わせじゃなくて、指輪をはめるだけなのに遅れる訳ないだろ普通)

(せっかく花もたせてあげよつてのに、つまんない奴)

そんなくだらない花なんかいるかよ。

(んで、何で遅れたんだよ)

(……………キンチョーしてた)

響く声に照れくささが見え隠れしていた。まあこれから和音コトとしてやっていく相手だ。お説教もこれぐらいにしておくべきだろう。

(どんな人かと思ってたけど、キンチョーして損した)

もっと色々言っておくべきだったと後悔した

(俺は火野昇、君は？)

(倉守くらもり美海みみ)

(よろしくな倉守)

出会い編2

ぐだぐだと指輪越しで会話するのもあれなので、俺たちは場所を指定して落ち合うことになった。

他の生徒達もまあ似たような物で、あえて分類したとしても、学生寮の方まで行くか（基本的に和音の部屋は隣^{コト}になつてる。）か、そこら辺のファーストフード、ファミレスにでも入るかのも二択だ。

俺は人混みが嫌いだし倉守も人混みが嫌いだったので、闘技場から一駅離れた大学研究棟駅のホームになった。

学園の敷地内には電車が走っている。学園の敷地を縦に一本横に一本周りをぐるりと囲むように一本存在してる。

学校ごときに何で鉄道までしかれていいのかと言えば、正確に言うところの学校は学校ではなくて魔法特区に指定された特別な場所だからだ。その魔法特区の中に教育施設が分散して配置されていると言った方がより正しいが、世間一般では魔法大学と一纏めにされている。

この学校が殺人を実質容認しているのもこの魔法特区制度が主な原因だ。

日本が魔法産業を主軸にする国家戦略を打ち出して三十年。その甲斐あつてか現在の日本は魔法技術に関して他の先進国よりも十年ほど先と言われている。

そう言うわけで、この学園の敷地というか、魔法特区には様々な企業があり、様々な魔法の実験が行われ、富、名誉、地位を求め人が集まり、命がゲーム感覚で消えている。

電車に数分ほど揺られていると大学研究棟駅についた。

学生寮がある方面とは反対側にあるので、先ほどの人混みは夢か幻かと聞きたくなるほど人が全然居なかった。

駅にいるのはスーツを着たおじさんとか、白衣のままスーパーの

袋をぶらさげている姉さんとかで、少なくとも俺の和音コトと言えるよ
うな人じゃない。

俺はちよろちよろっと辺りを見回すけれど、やはりそれらしい人
はいないし、指輪で話しかけても反応が無かった。大半の人間にと
って指輪による通話は思考が漏れ出ているのとほとんど一緒なので、
用が無ければまずしない。

つまり、また待つのか……これなら携帯電話の番号ぐらい聞いて
おけば良かった。魔法特区内なら電車内での通話も合法だしね。

ベンチに座り十分ほど待っているとようやく次の電車が来た。扉
の開く音と共に俺はその中に少女がいるかどうか探すためにきよ
りと見回す。

はずだったのだが、そんな必要もなく、目の前にああ絶対こいつ
だ。と確信させる少女が目の前に立っていた。

初めて見たときの感想を言わせて貰うのならば、最悪だった。

まず身長が低くて、手足が細い。これが女の好みについての感想
だったならば、まあ悪くない。と軽く返せたかも知れないけれど、
魔法使いとしては致命的だ。

魔法使いは肉弾戦もこなすので、出来れば高身長の方が良い。

真っ赤な髪をツインテールにしており、つり目で真っ赤なアンダ
ーフレームの眼鏡をかけており俺のことをまっすぐ見据えている。
唇は上に曲がり、さてこれからどんな悪戯をしようと悩んでいるよ
うにも見えた。

眼鏡をかけているのも魔法使いとしてはマイナス要素だ。コンタ
クトレンズに後で強制的に変えさせよう。

俺が値踏みをしているように倉守も値踏みをしているのだろう。
電車がホームから立ち去ると美海は口を開いた。

「ごめん待った？」

何、ふざけた事をいつているんだ？ 大体同じような時刻に闘技場から出て、同じ駅で電車に乗ったはずなのに何故遅れる。

文句の一つでもぶちまけてやるうかと思っただが、俺は別の台詞にした。

「いや今来た所だ」

今後の事を考えれば対立する意味なんて無い。そう言うわけで俺は美海の言うところの花を持たせて貰うことにした。

「どう考えても一本先のに乗ってきてる」

どうやら美海は花より団子らしい。

「さつきお前が今来たところって言うシチュエーションって言ったからわざわざ言ったのにこれかよ」

「あんなあたしが適当に言った言い訳信じてたの？」

「次から絶対に信じない事に決めた！」

魔法の相性とかどうでも良いから樹里と組ませて欲しいと心の底から願いだめた。

「んで、倉守は何の属性が使えるんだ？ あとどれぐらいの腕前なんだ？ 知らなくて悪いと思うが倉守ってどんな家なんだ？」

「いっぺんに言うな！ ええと、試験の時に調べたのだと炎だけだった。魔法はこの学校に入って初めて学ぶ。最後の質問は意味がわからない」

俺はその答えが訳解らん。

まず人間は体内に属性比率と言う物がある。例えば樹里ならば水が四割風が三割で他の三割が他の基本属性全てで構成されている。

この属性比率が使える魔法の優無や得意不得意を左右する先天的な要素となる。この属性比率内に存在しない属性はどうやっても唱えることが出来ない。ワグナー方式では100%を切ってしまう属性を正確に判断することは出来ないの、美海の具体的な属性比率は解らないけれど、炎が八割で他の二〜三属性で二割と言うのが妥当な所だろう。

魔法の基本属性は九種類とされており、一般的な人間で約五種類

使えて。名家の出身だと全て使えることが多い。

ワグナー方式だとこの使える属性の数も考慮に入るはずなのだが……

「どうした？ あたしの美貌に惚れたか？」

「まな板を通り越して洗濯板のお前が何を言ってる？」

「何を!？」

あ、でもよく見たらふくらんでいるようにも 服の皺だった。

「それより少し用事を思い出した」

倉守はぎゃーぎゃーと何か叫んでいたけど俺は無視して職員棟に向かった。名家の中でも五本の指に入る火野の出身で、基本属性を八種類使え、さらに禁忌属性である時の属性まで使え、五歳の頃から英才教育されてきた俺が、ド素人と組むなんてあり得るはずがない。

リンクリング
結合指輪に故障が無いとするなら、学校の方に問題があったに違いない。そう思って俺は直訴しに来たのだ。

俺は倉守を置いて職員棟に入ると、俺は知ってる顔を見つけた。

「おじさんちよつと話があるけどいいか？」

「ここでは樹里のおじさんじゃなくて、氷柱先生と呼んで欲しいな」
「わかったよおじさん。それで、俺の和音コードが間違ってるけどどういう事だ？」 おじさんは突然笑い始めた。あまり品の無い笑い方だけど、誰もおじさんの方を見ようとはしない。たぶん聞き飽きてるんだろう。

「ああ。そっぴやそうだったな。すっかり忘れていたよ。」

確かに昇が間違っていると思いたいのも解るよ。確かにボクも昇と倉守さんの判定結果には驚いたし、間違いだらうと思って再検査もした。

しかし間違いはなかった。一年生の中で君と一番相性がいいのは倉守美海だ。

この結果は職員達の合間でも話題になったよ。

火野の中でも歴代最強クラスの素質を持つ入試一位の魔法使いと、
どこの馬の骨かも解らない補欠入学で入ってきた一般人がタッグ
を組む。

学園始まって以来の最強と最弱のコンビ。

こんな面白いことはボクでなくて面白がるだろうね」

「もう一度再検査をしてください！」

「一度どころか三回ほどしたよ。倉守さんの詳細なデータは無かつたけれど、君の正確な判別データを火野に提出させた。その結果解ったことと言えば、他の組み合わせに間違いを見つけたぐらいだ。これ以上の検査はしないし、組み合わせの変更も無い」

頭が真っ白になった。

「ボクとしてはだね。最強と最弱のコンビと言うよりは火野であるのに、火が使えない少年と、火しか使えない少女のコンビであると言う方が面白いと思うがね。」

二人で>>地獄の業火<<と名乗るのがベストと思うが、どうかね>>地獄の業<<君?」

>>地獄の業<<って一言で俺は思考を取り戻した。

俺を蔑むための二つ名。

火野の中でも歴代最強の炎使いと称された俺の父である火野彰は
>>地獄の業火<<と二つ名で呼ばれていた。

そんな父を持つにもかかわらず俺は火が一切使えない。だから地獄の業火から火をとって地獄の業。

お前の業は火が使えないことだとも言うような。そんな二つ名
まあだからといってこの快樂主義のおじさんが、わざわざ俺を蔑む理由も無いだろう。

条件反射で俺が反応してしまっただけで、おじさんとしてはただ単に言葉遊びとして楽しいから使ったぐらいだ。

何度も快樂に付き合わされた身としてはこれぐらいで怒る気にはなれない。

「わかりました。ありがとうございます」

「倉守さんの今後の成長に期待しなさい」

俺を超えてしまうような爆発的な成長をされたらされたで、俺の今までは何だったのかと疑いたくなるので遠慮して貰いたい。

「そつだそつだ。昇君。後で君はボクに連絡してくるだろう。だから携帯の番号を覚えておこう」

こつやつて能弁に語るとき、それは不幸の予兆だと今までの人生経験で理解していた。

時間にして五分も経っていないのだが、倉守はご機嫌斜めになっていた。

いきなり連れてかれたと思ったら逆に放置だ。

俺でも怒る。

と言うか俺はさつき似たような状況に合わされて怒ってた。

俺は謝罪の言葉を述べると、倉守は一応満足そうな顔をしていた。ハッキリ言つて下手に出るのは好きじゃない。

でも、こつという関係にしておくしかない。

俺にはこの学園で絶対に取り戻さなければならぬ物がある。

その為には優秀な和音コードが必要だ。しかしそれが手に入らない以上、実力の低さを相性の良さでカバーするしか、俺には打開策が見つからない。

会話はぷつりぷつりと定期的にとぎれてしまう。しょうがないので、俺はその場で見つけた物とかを話題に出してはみるけれど、美海は意図的に会話を止めようとする。

そんな会話とは言えない会話をしながら、俺たちは学生寮にまで

来ていた。

学生寮は基本的に全て構造が一緒だ。なので極端な当たり外れと言う物は存在しない。あえて言うなら駅が近いとか、隣人がとてもいい人だったとか、隣人は音量全開でデスメタルを聞いていてうざいとか。当たり前外れなんてこれぐらいだ。

「倉守、お前何号室だ？」

「203号室」

「今、203号室って言ったか？」

「言った」

「俺も203号室だ」

お互いに何とも言えない空白が出来た。さっきの会話の比じゃない。今すぐここから逃げたい。できれば昨日ぐらいに。

俺は携帯電話を取り出すと、氷河氷柱（おじさんではなくて先生）と自己主張の激しいアドレスに電話をかけた。

「やあボクの予言は良く当たるねえ。教師を辞めて占い師にでもなりたいぐらいだ」

「ほんと教師やめてくれよ」

「やれやれ、女の子と同居するのがそんなに嫌なのかい？ ボクが同じ年齢の頃なら、大喜びしているぐらいだよ。当時のボクは女の子と一つ屋根の下で暮らして朝起こされたいと常々思っていたからね」

「てめえの妄想なんて聞きたくねえ！ 何でそんな無茶苦茶な話が通るんだよ！？ 何か間違いがあったら大変だろ！？ 倫理的におかしいだろ！？」

「ほう。樹里と二週間前まで一緒に生活していた君が言うのかい？

片腹痛い。」

「俺以外の生徒達の話だ」

樹里に関して言えば、異性と認識するのが難しい。

「簡単に説明すると、和音^{コード}同士で衣食住を共にした方が、相性が良くなるのは君は身をもって知ってるはずだ。それを全生徒にもして

貰おうと言っただけだよ」

「倫理的にありえない！」

「君は楽しいことを言うね。この学校に入るときに人を殺すかも知れない。殺されるかも知れない。そのような決意を胸に抱いて来るし、実際に書類にサインまでしているのに、今さら男女の同居ぐらいで文句を付けるようなのは、この学園ではやってはいけないね。個室が欲しいと言うなら学園ランキングの上位に入れば特典で貰える。君の実力なら十二分に可能だろ？」

俺は人を殺す覚悟をしてきた。きつと倉守も樹里も同じように決意して来たはずだ。

「おじさん俺が悪かった。ごめん」

「君が謝ることは無いよ。同居の話を学校に持ちかけたはボクだしね」

「お前が原因かよ！！ どうしこんな無茶が通るんだ！」

「ボクは魔法使いとしては三流だけど、人心掌握は一流なんだよ。折角だから説明すると、同居で開いた学生寮を他に貸し出す為だよ。他にも色々諸事情があるけど一番の理由はこれだ」

「本音は」

「面白そうだったから」

「死ぬ！」

「君はそうやって怒っているけど、男同士でむさ苦しく同居する人々に土下座しなくちゃいけないと思わないのかい？」

「全く」

俺としてはそっちの方がまだマシなんだよ！

「そうか。とにかく同居するのも変更は無い。ボクも忙しい身だから失礼させてもらっよう」

俺が文句を言う前に携帯は切れてしまった。

「……クソ野郎！！！！！！！！！！」

一人暮らしになるからアニメグッズに囲まれて暮らせると思ってたのに！

今まで頑張つて樹里にもばれずにオタクやってきて、高校に行けば一人暮らしになるから、好きなだけ囲まれて暮らせると思っている！

あのジジイ！

魔法少女かなめマギカのトモエさんのフィギュアとか、トモエさんのおっぱいマウスパッドとか、トモエさんの抱き枕とか全部買えないだろ！！

「ちよつと」

「ああ！？」

「ごめん…なさい……」

悪いのは倉守じゃなくておじさんだ。それなのに倉守に怒りをぶつけたつてしょうがない。

「ああごめん。同居で間違い無いって」

「そんなのつてありなの！？」

「君たちは人を殺すかも知れない覚悟、人に殺されるかも知れない覚悟をしてきたのに同居ごときグダグダ言ったってさ」

犯されるかもしれないと言う危険性は、殺すかも知れないと言う覚悟の中に内包されている。らしい。

ところで、一人暮らしだからアニメグッズを収集しようとしていた俺の願望は？

「 倉守つてアニメ見る？」

「 見ないけど、何で？」

俺の希望は途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8195z/>

純粋な炎のアンサンブル

2011年12月26日00時48分発行